



miho Hatanaka,

娘が出産をした。例のマタニティ・ヨーガのプライベートグループの3人も皆出産し、すでに母親として生活をしている（第3話）。戸惑い、悩みつつも、子とともに日々の喜びのなかにいる彼女たちに、心から応援の気持ちを贈りたい。今回は、娘の出産に纏わり想起する話と、二編の詩——娘が出産をした翌日と、娘の妊娠が知らされた翌日の——を。



【第5話 お産に向かうひと その二話】

昨日、娘に女の子が産まれた。陣痛が始まってから長い経過の後の誕生であったので、心底ほっとした。遠方でもあり、私は自宅にいるまま、娘から時々送られてくるメッセージで様子を知る程度である。痛みがつき始めてから丸一日が過ぎた夜には少し陣痛も遠のき、疲れ果てて一人、産院で過ごす娘を思いつらかった。翌日の昼近くになって、娘のパートナーから「女の子が産まれました。母子ともに安定しています」と連絡があり、程なくして子の写真が送られてきた時、我が子が産まれた時以上の安堵を感じた。不思議なものである、職業柄、今までが決していい加減な気持ちでいたわけではないのだが、娘という（言わば）「じぶんごと」としての感じ方があり、しかも自分自身のお産の時ともまた異なる感覚を抱いた。娘と、まだ見ぬ彼女の子。ふたりのいのちが安全であるのが何よりであることを思った。

娘もまた、冬の産まれである。当時、実家の近くに暮らしていた私は未明からの陣

痛をやり過ぎつつ、昼になってから母に伴ってもらって近所の病院に歩いて入院した。そこはまた、私自身が産まれた場所でもあった。キリスト教系の病院で、陣痛室には聖書の言葉が書かれた一枚の額が掛けられていたと母から聞いていた。

『今のこの苦しみは、後にもたらされる栄光に比べると取るに足りない』

この言葉を見つめながら、母は陣痛の時を過ごしたそうである。助産師の学生の頃に「なるほどなあ」と思って聞いたことを覚えているが、自分の出産のために入院した時にもまだ、なんとこの言葉はそこに掲げられていた。母から聞いていたこともあって言葉自体には特に大きな感慨もなかったが、逆に馴染むように、その時の自分の身に起こっていることに重ねて「信じよう」として過ごしていたように思う。それはすでに、私の“お産観”の一部として備わっていたのかもしれない。痛みは痛みとして感じながら、その大きな“しごと”を終えて、私は母親になった。

退院の日はみぞれが降っていた。家に落ち着いて、アラジンのブルーフレームヒーターの柔らかな炎が灯り、娘を横にふと、「祖母から母、母から私へと結び繋がれたいのちを、私がまたひとつ、ここでこの子に結んだんやなあ…」という想いがわいて感慨深かった。冬の、しんとした静かな部屋で、娘はただ眠り、私はひとり、そんなことを考えていたのである。だから娘から、妊娠中の検査で「女の子を授かったみたい」と聴いた時には、「確かなことは、まあ、顔を見てからね」という程度にしか思わなかったのに、後の検査で子宮が確認できたと聞いて、少なからず感動を覚えた。

「まだ胎内にいるあなたも、私やあなたのおかあさんと同じ性なんやね」。

将来、この子が新しくいのちをつなぐかどうかはわからない。けれども、同じ“器”を体内に持つということの、生き物としての深いつながりを感じた。

さて。対面はまだである。しばらく手伝いに行くが、少し先の話になる。親しい友人から「孫はかわいい？」と尋ねられ即答できず、“ご期待”に反して「はて？」と考えた。写真を見て「かわいい」とは思うけれどもどうも実感が伴わない。ただ単にうれしいのとも違うし、どうかすると悲しいような気持ちさえある。…ああ、そうか、「娘が母に」ということの実感がわいていないのだ、きっと。何にしてもものすごく不思議な感じである。産後初めて娘に会う時、私はどのような気持ちになるのだろう、娘との新しい関係も、始まるのだなあと思う。こういった明確に言い表せられない気持ち、それこそ、マタニティ・ブルーズならぬ“グランマあ・ブルーズ”とでもいう精神状態があるとするならば、研究をしたらおもしろいかも、などとも思う。

この数年の間に、何人かの親しい者のいのちを送った。そして今、新しいいのちを迎えた。娘が産まれた頃には存命であった祖母はとうに亡くなり、母も老いた。この世に、波が引いては寄せるように、“ここ”に新たないのちをひとつ置き、そして持ち去っていく。自然は、何ごともないように繰り返し、静かに平らかである。人の営みは連綿と続くということを思い、冬の星空を見上げると清んで美しい。その果てしなさに、どこかほっと安堵する私である。

【きのう うまれてきたあなたへ】

きのう うまれてきたあなたへ
きのう、うまれてきて ありがとう

おなかの、
お外 の せかい にはおひさま
があって
あかるく
あたたかく
お外は広いですよ

あなたのおかあさんは
あなたをずっとおなかのなかで
守ってきて

そのおかあさんをおもうわたしは、
じぶんがそうであったことを
まるでそのままのよう に
おもいだします

くりかえす いのち のれきしの
なかに
あなたのいのちがくわったこと、
を
そのことのおおきなよろこびを

わたしはそらにむかって
ありがとう
といたたいです

【娘】

あなたの胎^{ほら}に

いのちが宿る。

かつてわたしに

“あなた”が宿ったように。

私は今、経を閉じようとしていて

あなたには今

新たな 役割 が担わされる。

いのちの

これまで永く続いて来、

これからも続いてゆくことの

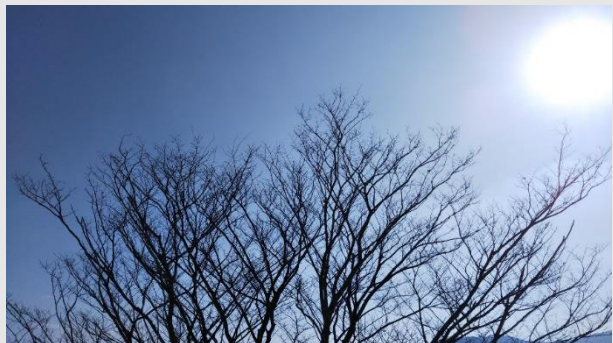
ほんのちいさな ひとつのこと。

ほんのちいさな こと。

私はひとつの 役割 を終え

そして自分自身になって

また新しく生きはじめる。



Born